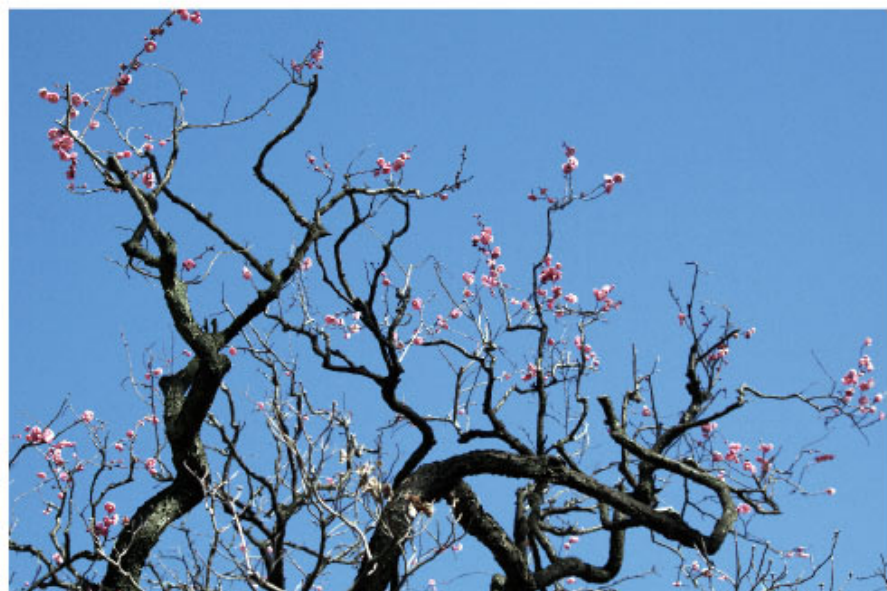


あを

2

2011





散るすすき寒くなるのが目にみゆる
 故郷や近よる人を切る芒
 陽炎や芒かるかや女郎花
 夕立の枕元より芒哉
 芒から菩薩の清水流れけり

一茶

恩田秋夫の 一茶俳句切手



初出は「散る芒寒く成つたが目にもみゆる」。切手シートは四季の意識がなく選ばれてゐるので二月は芒の句にした。先生の作品は「梁塵秘抄」。墨版は通常どおり版木で刷り、そのあと紙の裏から彩色する。師の棟方志功の考案ときく。恩田先生の散歩は宝物探しの感がする。路傍に生えてゐる雑草の花は特に好物である。この仏の裏彩色は絵の具ではない。散歩の折得た土に膠を混ぜたもので彩色したと悪戯っぽく話された。この自由な発想は得がたい。先生の宗教観を雄弁に語つてゐるやうです。

(喜孝)

あそ

二月



走 る

走禽類かなしきかほでかけてゆく
手袋で葉書つまんで道あるく
十二月ふはふはふはのホームレス
走るとき鬘となる冬の月
會ふために走りしかの日冬の月

本町三 佐藤喜孝

◇

蜘蛛の巣の意外につよき冬に入る
水洩や犬の嫉妬をしてをりぬ
落葉径こころ平静とり戻す
石路に水滴光る目覚かな
楚々として薄紙のごと冬薔薇

大 宮 早崎泰江

◇

爪に灯を点して今日の蜜柑むく
突き当りが湖白鳥を抱きにゆく
風花や運命線をひらくとき
冬の別れさいごにそつと胡蝶蘭
生きるだけ生きて大きな初日の出

河田町 堀内 一郎

師 走

スカイツリー日に日に延びて街師走
断捨離の言葉溢れる年の暮
人生の大掃除なる年送る
大魚群サンタも混じる水族館
第九聞き紅白を観て年明くる

中 井 森山のりこ

臘 梅

臘梅に見馴れぬ鳥のけふも寄る
水面染む冬のもみぢは水の底
野水仙そのままに挿し古稀祝ふ
十二月葡萄に房の小指ほど
いつになくひとの恋しき冬薔薇

落 合 森 理和

◇

いつとなく並ぶかもめや冬夕焼
大空に反りかへり葦枯れにけり
ならひ吹く海くるぐろと海苔筏
落ちる日のまつしぐらなり枯木中
葉隠れにつばみ無数にさくら草

本町三 吉成美代子

◇

泣きまねをしそなたたる猫じゃらし
青空を着飾りてはや石榴割れ
手と足の指さらはる霜の夜半
蝸の昨日またけふ明日かな
温酒素風をすくふ掌

鍋屋横丁 吉弘恭子

◇

冬暖か軒の鯉鮎のゆらゆらと
案内の遠くなりゆく暖房車
蝦蛄葉さぼてんその日その日の紅の色
佗助の耳敲てる私語ささめごと
蓬萊山の掛軸とする年用意

清瀬 赤座典子

◇

お米まくすぐ降りてくる冬の鳥
日向ぼこひそひそ話好きな人
寒卵半熟にしていただきぬ
ちゃんづけで呼ぶこそばゆさ花八手
あそぼうの声が消えたる十二月

聖蹟桜ヶ丘 安部里子

◇

帰り花旅はひとりと覚悟せり
振りむいてもう振り向かぬ寒鴉
親よりも妻との月日福寿草
身の上にいろいろありて冬木の芽
冬蒲公英短きことよこの一と日

曳舟 遠藤実

◇

駅を出て寒月に肩いからせぬ
寒いねとまづ言ひ合ひて年忘れ
寒卵割る手に力こもりけり
年忘れすぐに煮つまる牡丹鍋
男酔ひ喪の家を出て大きくさめ

逗子 鎌倉喜久恵

四温日和

川崎・小田栄 木村茂登子

冬雲の肩にかかりてくる重さ
銀杏が潰されてゐる通学路
手袋の小さな片手落し物
クリスマス偽物と識り買ふバッグ
蒲団干すそのほか四温日和なり

◇

通勤電車今日は賑やか紅葉狩
清澄はあをあをとして櫨紅葉
娘らはバッグに靴までクリスマス
ついに買ふ細めのパンツ十二月
秋ぞ行く世代交代の感ありて

白金 斉藤裕子

◇

大カーブ雪落し行く夜行バス
溝に潜み鴉と対峙冬の猫
首のべて飛行船見る小六月
目を閉ぢて拝むかたちに輝ぐすり
松手入れ辨当箱の蓋に白湯

京橋 篠田純子

◇

室の花投葉ひとつ減りにけり
蜜柑の香指に残りし欠伸かな
浅漬の淡雪ほどの塩加減
ねずみ取らぬ猫にてありし日向ぼこ
先生の声は空色冬日和

千駄木 芝 尚子

◇

じねんじよをかかへて帰る冬の街
子の編みしカーデীগン着て厨事
市田柿うましうましと夫思ふ
左まき右まきマフラ―通学路
冬至南瓜四ッ割りにして売られけり

宝泉寺前 芝宮須磨子

点すまで

剣地東出 定梶じょう

帰りきて林檎匂へり点すまで
追試験明日は雪の予報かな
霜深き月の山並空にあり
雪女過ぎれり守衛誰何せり
掛け暦水屋箆笥のわきに果つ

◇

所 沢 須賀敏子

熊避けの鈴を鳴らして十二月
ふたたびの五年日記とスニーカー
塩原の少し寂しげ冬の滝
黒羽の芭蕉の句碑に冬日向
姉ひとり深くねむりし十二月

石榴の実

浦和 竹内弘子

枯れきって落ちわすれたる石榴の実
冬椿海がざらざらしてきたる
紫蘇の実を箸でしごくも七年忌
沈黙は金にをはりぬ古暦
祥月やつはぶきの花清々し

冬陽

田端 田中藤穂

足もとの枯れたるものへ日のこぼれ
金メダルの走者細身や冬陽浴ぶ
晩節を貫く構へ木守柿
分けてゆく芒のぬくし夫に蹴く
薄氷のごとく天あり道を掃く



参宮橋 續木文子

山茶花の咲きながら散るそこかしこ
木枯や髪ぼうぼうと仁王立
母恋し天までとどけ曼珠沙華
大滝の龍も登れぬ氷柱かな
夜なべする母の隣りで睡るわれ

枯蠨螂

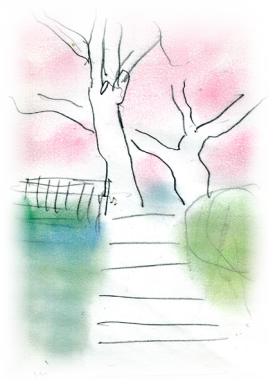
三光坂 東亜未

矢印となりて立ちをる暮の通夜
ひと足が一步とならず枯蠨螂
帰り花いろはにほへど名の忘れ
蒲団叩く埃てふもの終りなし
花旋風どこかで宇宙の音がする

石榴の実

富田 長崎桂子

電燈の割れない笠に煤払
鯉太る池は湛へる冬紅葉
ポップコーン遠巻にする昼焚火
金蠅に西へ西へと冬日向
冬良夜道路に箒残りをり



一月作品より

定梶じよう

空っぽのバナナの箱が十三夜

佐藤 喜孝

バナナの箱は、どこの商社のものであれ、材質は同じ。見ればすぐ分かる。蓋には上面に隙間があつて、いわゆるA段という材質のダンボール。身は二重の材質でできていて、これをAB段という。そして基本的には積層という紙質でできている。巷ぞと知ったかぶりを披露したのは、そんな関係の仕事を近年したことがある故です。十三夜の月明りでもバナナの箱であることは瞭然。そして空っぽとあれば身と蓋が別々に在っていたのかも。秋寂びの一景。

暮の秋鏡の裏に置いておく

墓のうらを詠んだ俳人はいましたが、鏡の裏とは。しかも、晩秋をそのうらに置くという。不思議な句です。付度するに、鏡の裏はいつでも暮の秋のようなもの、そんな状態にあるのが

鏡の裏である、と。ふしぎな句ではありますが、充分に納得すべき句。あるいは自得すべき句。考えてみれば、鑑賞するとは自得すべきものかも。

見ゆるもの皆透きとほり冬に入る

長崎 桂子

真冬からみれば十一月初旬はまだ暖かいのでしようが、秋暑をへて迎える立冬の候は、もう朝晩随分冷えを感じます。それを「皆透きとほり」と表現した。この感覚、読み手詠み手とも大切にしたいもの。

来し方を飛石として冬深く

堀内 一郎

ふり返ってみれば、過去の事は飛びとびにしか記憶の中によみがえらぬという。それを飛石に例えること、言い得て妙。

それにしても、掲句、ポーズがありません。そしてどこで切っても句に勢いがなくなります。

結局間がなくても、やっぱり「来し方を飛石とし

て冬深く」がベストなのです。ベテランの一句、というべきでしょう。

いちにちが短きことよ冬蒲公英

遠藤 実

短日という季のことばがあつて、俳句の約束では上五中七は「短日」の一語で済むはず。そんなことは重々承知の上で作者は「いちにちが短きことよ」と嘆くのです。「短日」は文章語、掲句上五中七は話しことば。冬蒲公英を仲介にして日短きことの感慨、思わずことばとなつて口をついて出たのです。

新しき卒塔婆の下の青みかん

竹内 弘子

客観写生いっぱいやりの結社誌に所属していた友人。成績のあがらぬ原因を分析して、「何が何してどうなつた」とまで言わなくては写生俳句と認められぬ、と気がついたそうです。

掲句、卒塔婆の下にある青蜜柑。それも新しい卒塔婆のもとにあるのです。それらがどうなつたとは一切言っていない。というより、言つてはいけません。

それが俳句であると。

のちに友人は、結社の同人に邀えられましたが、過ぎる些末主義に賛同できず、投句を中止。しかし、私の見るところ、その時の鍛錬がいま役に立っていると思うのですが、彼は認めようとしません。

星五位のじつと動かず秋の杭

田中 藤穂

随分やかましい句会があつて、「梅雨の妻」などを使うと「本来そんな日本語はなかった」なぞと突っこまれました。

しかし、です。俳句的表現として「梅雨の妻」も「秋の杭」も、あるいは「春の馬」も「夏の草」も同等。大いに省略的表現をしようではありませんか。

石仏の笑つて見ゆる月明り

續 木 文 子

能面はその角度により、いろんな表情に見えるそうです。あの般若面でさえ、演者が少し下を向くだけで、妬み怒りの相が考えぶかそうな表情に見えたりする。面打ちと演者のちからなんでしょう。

吟行案内

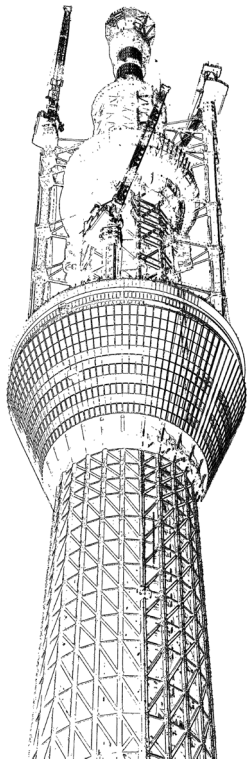
スカイツリー界限

日時 五月十四日（土） 十一時

集合場所 東武伊勢崎線「業平橋」改札

申込先 3371-4623（佐藤喜孝）

五月十日までご連絡下さい。



前月作品

天高し健やかに老い句に遊ぶ
 大江戸線深きところから出て小春
 観音に縋る安産秋ふかし
 日の鴨と日陰の鴨と入替る
 笹群らやささめきわたる初しぐれ
 踏切のカンカンカンと柿熟す
 帯解きの母子をかこむエレベーター
 山茶花や暖かかりし句友の手
 石仏の笑って見ゆる月明り
 金秋や世に一冊の『仁王立』

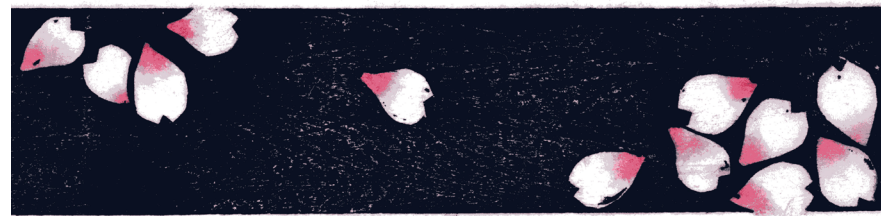
鎌倉喜久恵
 木村茂登子
 篠田純子
 芝 尚子
 定梶じょう
 須賀敏子
 竹内弘子
 田中藤穂
 續木文子
 東 亜 未
 喜孝抄

喜孝 抄

一人一句

暮の秋鏡の裏に置いておく
 見ゆるもの皆透きとほり冬に入る
 憂き心すいと受けとむ石路の花
 来し方を飛び石として冬深く
 ボジョレーの解禁日なり鳥渡る
 石路の花ないしよないしよとこそばゆし
 貫木の金具キラリと冬の月
 交番に立つひと冬の手をかくし
 雨上り山茶花の白堪能す
 低くとぶ黄の目立ちたる冬の蝶
 条幅の墨のにじみや冬の風

佐藤喜孝
 長崎桂子
 早崎泰江
 堀内一郎
 森山のりこ
 森 理和
 吉成美代子
 吉弘恭子
 赤座典子
 安部里子
 遠藤 実



あをかき集

堀内 一郎 選



鎌倉喜久恵

行く年や井上ひさし森澄雄
捨てること上手になれず去年今年
季寄せあり一人の夜長マグカップ
猪の小屋の前より登山道

須賀 敏子

小晦日トランプを吹く少女
昨日より今日暖かに菜を洗ふ
波消しの一つ一つに百合鷗
裏町は猫の溜り場冬うらら
大根によう汁染みて母の味
ハテ今日は何をしたかと花八ツ手
風邪三日やうやく癒えてくりやごと
身のまはり片付かぬまま年を越し
枯れ切って安らひでゐる蓮の池
クリスマス席ゆづらるる夜の電車
古本屋まだ灯のともるクリスマス
桜紅葉知らない街のバスに乗る
厨にも山の水引き柚子の里
冬の虹祖母の来てゐる水車小屋
駐車場に子供四五人冬休

田中 藤穂

木村茂登子

十二月くさめのへたな男かな
煤はらふ巫女神主も袴腰
総持寺の銀杏といふ茶碗蒸
急ぐ人に急がぬ吾に年暮るる
出かけては風邪ひきなほす十二月
風邪ごちざらつく真夜のブラウン管
風邪ひきて遠くにきこゆ人のこゑ
かくれんぼしてゐるやうな風邪三日
浮寝鳥こぼしてしまふかくし酒
何でも屋奥に冬日のひとつあり
書に挟む写真一枚十二月
招かれて雲踏むごとし敷松葉
湯豆腐を孤高の猫と食べにけり
買物のメモに書き足す風邪薬
いろいろの思ひしみに冬帽子

佐藤 喜孝

芝 尚子

たそがれの道に道聞く水漬
歩く夢みてゐる赤児シクラメン
西麻布の稲架に西麻布のすずめ
さざんくわや黄昏泣きは連鎖する
枯蓮うしろめたさの風の吹く
鮮やかなままにちりゆく冬もみぢ
死に化粧ビルの間に雪の富士
赤子泣くそれも笑ひに年忘
大つごもり家内灯し鎮まりぬ
高窓のキラリと光る冬木の芽
年の瀬や谷中銀座に箸を買ふ
行く年や「散華」の軸を賜はりぬ
残り火のうどんの鍋を囲みけり
靴音が冬を大きく響かせる
大根の筋目正しきサラダかな

森 理和

東 亜未

遠藤 実

佳句後言

さんさんと居場所守りて冬の星
不器量な蜜柑が話すふるさとや
夕焼の冬至の空を見てゐたる

早崎 泰江

山茶花や又一言の多くなり
霜柱子猫三匹走り去る

鴉とてせはしなく飛び年の暮

長崎 桂子

一病を語り林檎の賑やかに
林檎囓む九十歳の健やかさ

赤座 典子

後席の饒舌止まず雪見旅

枯枝に刺されし柿に鶉通ふ

吉弘 恭子

お地藏さん鴉とならぶ日向ぼこ

欠伸してのびして巡査冬の駅

行く年や井上ひさし森澄雄

敏子

言わずと知れた逝去の方々である。われわれの近くにも、この現象は夥しい。明日は吾が身と思うこの頃。下五に俳人を納めた処がこの句の重さで省略の妙を思わせる。

季寄せあり一人の夜長マグカップ

敏子

お勉強のようである。一人の夜長はさびしそうだが気楽に。加えて片手にマグカップ。好きなホットミルクかコーヒーク。

裏町は猫の溜り場冬うつら

喜久恵

表通りは交通が激しいし猫の居場所はない。私の近辺に車の通れぬ裏道があつて猫が体を寄せあつてゐる。そういうところは子供の遊び場のように限られている。うららかさこそ憩いの場に。

ハテ今日は何をしたかと花八ッ手

喜久恵

年のせいで記憶力の減退は甚だしい。しかし生き続けたいと願つて毎日を通してゐる。目立たない花八ッ手のように。生命をひそと咲かせて。

枯れ切つて安らひでゐる蓮の池

藤穂

華やかな時期は過ぎ無残な光景をさらしている。人出も少なくなかつて煩わしさはない。

人生も同じで、そう思えば肩も軽くなる。

冬の虹祖母の来てゐる水車小屋

藤穂

駐車場に子供四五人冬休

茂登子

多くの人が車を持つようになつて子供の遊び場がなくなつてゐる。近代化によつて自然がなくなつてきたからだ。広々とした私達の頃を思うと子供達が可哀相である。これからの子供達の行方は。

林檎囓む九十歳の健やかさ

桂子

高齢で長生きをするようになった。それにしても九十歳は得難い存在である。林檎囓むは人生への挑戦で私達への叱咤激励に聞える。私の敬老会仲間にも九十歳S女史、近々地域のシルバーフェスティバル・カラオケで五代夏子の雪中花を唄う。まごまごしてはいられない。

年のくれ

芝宮須磨子

冬の夕ぶつきらばうな見舞客

冬の夜形のちがふ靴みえる

点滴の落ちるそのたび冬日差し

イケメンの配膳係すきま風

もてあます夜の長さや冬浅き

長き夜を励むナースのたをやかに

早々に配膳準備冬温し

あけてくれししのめの窓冬はじめ

看護師のはげましのあり秋刀魚食ふ

言深くやすらぎうけて冬日和

無機質の病廊の端九州場所

試歩で買ふ自販機のお茶あたたかし

気がつけば米寿がそこに年のくれ

近世俳諧と漢詩文

参拾九

王 岩

空懸明月待君王

今上る客は化物ほとゝぎす

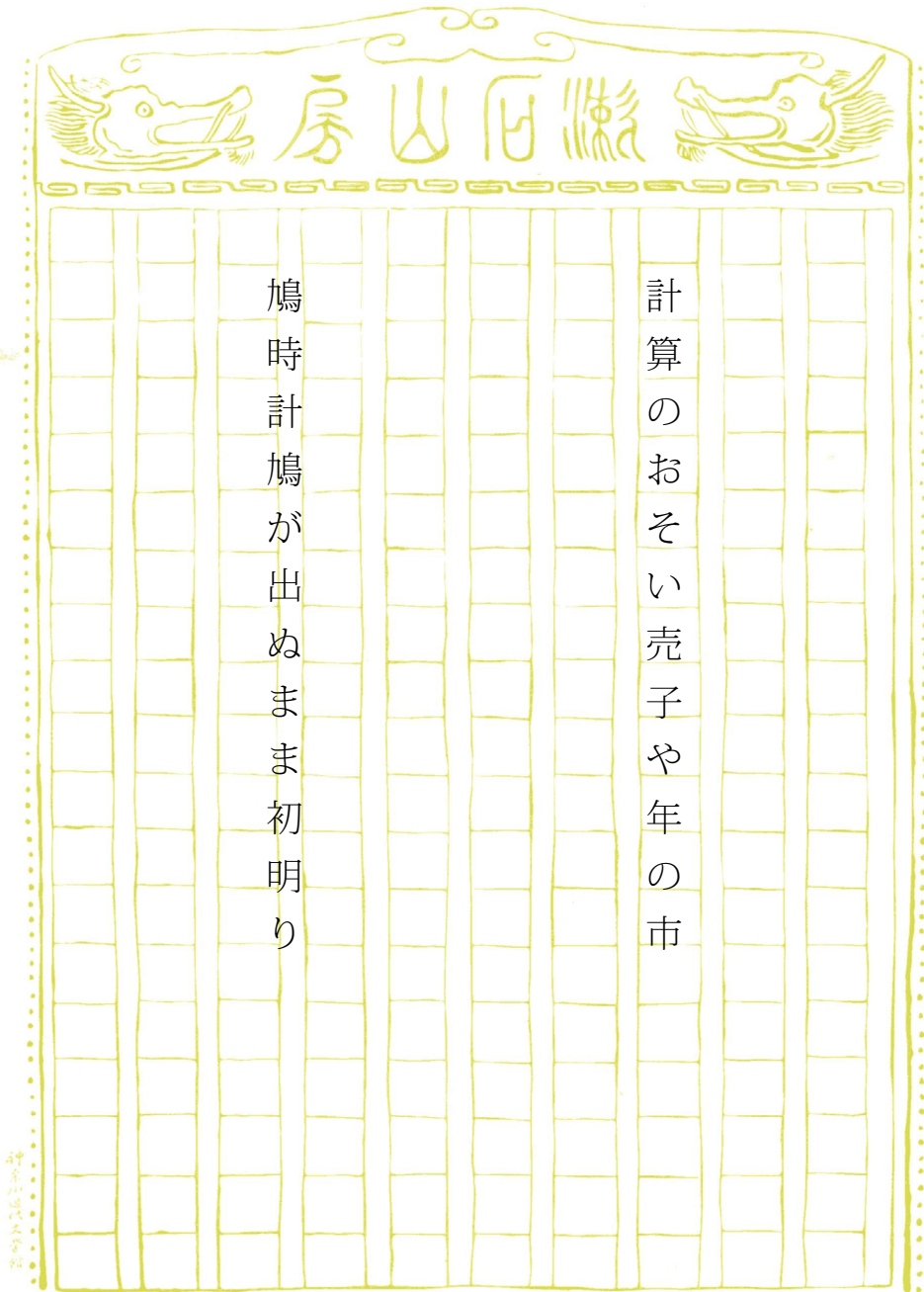
抱 一

酒井抱一（一七六一〜一八二八）江戸時代後期の画家。抱一派の祖。名は忠因（ただなお）。鶯村・雨華庵と号した。絵画・俳諧に秀で、特に尾形光琳に私淑してその画風に一層の洒脱さを加え一家の風を成した。前掲の句は『屠龍之技』にみえる。句題の七言一句は王昌齡の「西宮秋怨」に由来する。

芙蓉不及美人粧、 芙蓉も及ばず 美人の粧い、
水殿風来珠翠香。 水殿 風来つて 珠翠香ばし
却恨含情掩秋扇、 却つて恨む 情を含んで秋扇を掩い
空懸明月待君王。 空しく明月を懸けて 君王の待ちしを

計算のおそい売子や年の市

鳩時計鳩が出ぬまま初明り



あを柳集

兼題 計

佐藤喜孝 選

計算のおそい売り子や年の市

年の市には忙しいので無理矢理かり出され、不慣れな売子にされてゐる人もゐるだらう。注連飾を売る鳶職などは初手からかういふことには苦手な者もゐるに違ひない。この忙しい年の瀬にお釣りが合計金額の計算がもたしてゐる売子に作者は興味を抱いた。勿論好感といふことはないだらうが憎めなかつたやうである。年の市の変つた一景である。

鳩時計鳩が出ぬまま初明り

からくり時計といふほど大げさではないが、鳩時計の鳴き声はやさしく懐かしい。この鳩時計は壊れてゐるのか、または狂つてゐるのか分らぬが年は明け辺りが明るくなつた元朝に出てくるはずの鳩が出てこない事をおもしろがつてゐる。この方が俳人のお正月らしいともいへる。

題詠「計」（順不同）

暮六つに合はせる手巻置時計

東 亜 未

算盤の合計ご破算青木の実

田 中 藤 穂

克明な武士の家計簿枇杷の花

計算のおそい売り子や年の市

体温計風邪氣の肌へひやりとす

計らひの句集配らる秋の宴

年を越す柱時計も拭き清む

年の瀬に「武士の家計簿」上映中

木村茂登子

一年の計はまぼろし年暮るる

年忘れ時計回りに挨拶す

竹内 弘子

きつかけを計つてをりぬ猫の妻

篠田 純子





クリスマス九九の計算できたかな

鳩時計鳩がでぬま初明り

体重計乗るかのらぬか大晦日

一計の頓挫となりし帰り花

腹時計いつも狂って日向ぼこ

立春や四計たづさへ五十年

計画を立てただけなり十二月

家計簿に昨日を記す花八手

計算の苦手な暮し冬菜煮る

元旦の計ありすぎる生半尺

計略と言ふおぞましき鬼やらふ

計り賣る味噌酒醬油暮早し

冬瓜を体重計にのせてみる

小春日の動物園の腹時計

安部 里子

吉弘 恭子

長崎 桂子

佐藤 喜孝

十二月の句会

傳

中野区・カフェ傳

よくにほふ杖の長さの矢切葱
綾子
歩く夢みてゐる赤児シクラメン
純子
案内が遠く聞える暖房車
典子
落葉踏む心の平静とり戻す
泰江
分けてゆく芒野ぬくし白い雲
藤穂
浜千鳥あはせ鏡に収ひこむ
喜孝
ふたたびの五年日記を求めたり
敏子
泣きまねをしそなたる猫じやし
恭子
首筋の固まつて来し湯さめかな
敦子
掃かずおく日射にとほき濡れ落葉
茂登子
煤逃やキヤリアウーマン赤き爪
実
時忘れめぐる城下や炬燵舟
美代子
清澄の秋天のもと句集生る
喜久恵
母恋し天までとどけ曼珠沙華
文子
礼つくす用を済し終へ袖湯かな
理和

調句会

浦和・岸町公民館

目を閉じて花野を思ひ浮べゐる
藤穂
長居して柳に冬の灯がとる
喜孝
東角井晴臣賞や菊花展
ひがしのい
敦子
朱に染まりゆらめく水や櫛紅葉
泰江
とちるでもひらくでもなし朝顔終ふ
弘子
(十一月分)

七座句会

中野区・小川苑

大年の便器の蓋の自動かな
木枯
新走り黄昏泣きは連鎖する
純子
足もとの枯れゆくものへ陽のこぼれ
藤穂
ひと足が一步とならず枯蟬螂
東亜未
走るとき鬚となる冬の月
喜孝
曖昧な返事返して風邪心地
夏子
潦まつすぐ過ぐる十二月
恭子
一色に大樹の銀杏凜とする
房代
じねんじよをかかへて帰る街おこし
須磨子
ゆづり葉の実のくるぐろと亡師かな
綾子
白菜に伸びる縮むの小さき虫
理和

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜

岸町公民館 竹内弘子
(0488-863501)

あを吟行会

詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

あとがき

吉弘恭子様には一年の長きにわたり作品鑑賞を執筆頂きありがとうございました。二〇一一年度作品鑑賞は執筆者の希望で定梶じょうさんにお願ひし快諾を頂きました。遠隔の地、お会ひする機会もなく正に俳句そのものへの鑑賞、批評となることでせう。吉弘恭子さんはそれとは違ひ作者の日常までも知つてをられる環境にゐます。どちらが書きにくいのでせうか。比べることではないと思ひますが……。

今月の特作は芝宮須磨子さん。検査入院の体験を丁寧な作品にしてをられます。ご一読を。

あを十周年へのご厚志ありがとうございます。

安部里子 様 斧田綾子 様
恩田通子 様 芝 尚子 様
篠田純子 様 定梶じょう様

東 亜 未 様

竹内弘子 様

田中藤穂 様

續木文子 様

長崎桂子 様

早崎泰江 様

森 理和 様

またあをへのご厚志ありがとうございます。

木村茂登子様

芝 尚子 様

田中藤穂 様

東 亜 未 様

(佐藤喜孝)

二〇一一年二月号

発行日

二月十五日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝
竹僊

房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費

一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替

00130・655526(あを発行所)